国立国会図書館蔵『源氏ひなかた』注釈（影印・翻刻・語釈）

足立一勝・牧野さやか
中田あゆみ・山本和恵

本稿は、貞享四年（一六八七）に刊行された、小袖の模様図案集である『源氏ひなかた』（全三巻、国立国会図書館蔵）の一部を翻刻したものである。その一部とは、文学作品に登場する女性（計二十七人）にちなんだ衣装の雛形図を描き、その模様のいわれを記した箇所である。

本稿は岩坪健（同志社大学文学部教授）による大学院の授業で輪読して、院生が自分の担当箇所を翻刻して語釈などを付け、牧野さやかがまとめ、岩坪が加筆したものである。

【凡例】

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次の校訂方針に拠った。

1　漢字は原則として、通行の字体に統一した。特殊な略字、合字等は通行の表記に改めた。

2　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

3　誤写かと思われる箇所は右側の行間に（ママ）と記した。

4　文字の判読が不可能な箇所は、□で示した。

5　踊り字は、「ゝ」「々」「〳〵」を区別して用いた。

6　底本では和歌の肩に合点の記号が付けられているが、それは省略した。

7　読解の便宜上、句読点を付した。また振り漢字も付けて（　）内に記し、本文の右側行間に示した。掛詞の場合は、二種類の漢字を当てた。

8　行ごとに改行せず、追い込んで翻刻した。

二、底本では、見開きの右の丁に着物の雛形図、左の丁に模様の由来を掲載している。右の丁には上段、右下、左下に解説が書かれており、翻刻ではその順に翻刻して、それぞれの文頭にａｂｃの記号を付けた。

三、各項の翻刻の前に通し番号（1～27）と人物名（現在の通称）、その下に巻と丁数を記した。たとえば（上、3丁ウ・4丁オ）は、上巻の三丁裏と四丁表を意味する。なお中・下巻とも、目録を掲載した第一丁には丁数が印刷されていないが、本稿では印刷された丁数に従った。よって実際の丁数は、一丁ずつ多くなる。

四、翻刻の次に、本文の注釈を【語釈】の欄に記した。見出し語は、底本の表記のまま掲げた。語釈中での和歌の引用は『新編国歌大観』に拠り、（　）内に出典を記した。

五、【語釈】の次に【和歌の出典】または【出典】を置く。【和歌の出典】には、本文に引かれた和歌の出所を記す。なお『新編国歌大観』所収の和歌との本文異同も示す。和歌が引かれていない場合は、【出典】に本文の主要な典拠を掲げた。

六、見開きの左の丁には、右の丁に描かれた着物を着た女性の姿と、その人物に関わるもの（たとえば源氏物語の女三宮には猫）が描きこまれている。紙面の都合上、右側の図のみ末尾に掲載して、通し番号（1～27）を付けた。影印は『小袖模様雛形本集成』（学研、昭和四十九年）による。

七、上中下の各巻の巻頭には、目次が置かれている。便宜上まとめて、翻刻の冒頭に掲載して、通し番号（1～27）を付した。なお第24項と第25項は、目次と本文で順序が異なる。

八、書誌は以下の通りである。全三巻、三冊。縦二二・〇×横一六・三センチ。四周単辺、上下辺柱まで一八・一×一三・三センチ。上・中巻は各二九丁、下巻は三一丁。序文の末尾に「模様絵　加藤氏吉定筆」、跋文の末尾に「貞享四丁卯年孟春吉日　書林　文台屋治郎兵衛　敦賀屋三右衛門　梓」とある。

源氏ひながた上巻目録品定

1一 百敷の大みやこ風の御所染
極上のちやそめや桐つぼのもやう
2一 天下泰平の御江戸染
ちりもけかさぬはゝ木ゝのもやう
3一 はれ小袖にたれも正平染
天人の羽衣はいそうつ蝉のもやう
4一 扇のみか小袖にもはやる友禅染
五条あたりの染やにある夕がほの模様
5一 天神も見事なとの御託詚すがはら染
朱をばいくわの若むらさきもやう
6一 もゝくさにしてもはげはせぬ千種染
しく物はなき物ずきおぼろ月もやう
7一 気のとおつたに着せたいは伊達染
しなだれかゝるは大事ない物藤つぼもやう
8一 ふり袖は弐尺五寸がよし長染
色めいたはくわつと吹たうらのあかし模様
9一 透意とみゆるもことはりそれしや室染
ふせ籠にかけてきる玉かづらもやう

源氏ひながた中巻目録品定

10一 日の本といへとあかいは唐人染
ゑもん色めく女三のもやう
11一 おく糊盆色どる絵の具のさらさ染
そめやがふちにうき舟もやう
12一 共うらもよし紅うらもなをよし岡染
玉のをく方めせ式子もやう
13一 ちかい比よりはやる遠山染
いせ衆はいとしらしい斎宮もやう
14一 たが袖ふれし梅が加ら染
いかな人もすいて染とのゝもやう
15一 実盛かすみいろに黒ひびんろうじ染
白玉かなにきれいな二条の后もやう
16一 今はやるすげ笠の袖もかゞ染
うちより見事なはそとおり姫の模様
17一 はすはには見へぬ蓮の糸よりほそ染
絹はさら也かわち木綿にさへ和泉式部もやう
18一 初むかしならで今もすたらぬは茶屋染
山みちのそめ入はすそとこしきぶの模様

源氏ひながた下巻目録品定

19一　たち地の絹たつふりと尺もしゆんさい染
　かのこはいふにいへぬ春日野丶女もやう

20一　見事さは三国一ちん染
　みにくからぬ女中にみやす所のもやう

21一　磨みかきの女郎に着せたいは焼刃染
　そめにけらしなゐづゝの女もやう

22一　そめて北野のばゞまでもうこん染
　伊達げいすくない勾当のないしもやう

23一　しゆんだ中はふつてふり袖のふすべ染
　都そめは田舎のはてまでも小ざいしやう模様

25一　うす色にざつと一風呂ゆかた染
　花の色めくおどり小町のもやう

24一　とをつ丶十もかさね着の玉子色染
　出ず入ず上美ず下卑ず中納言もやう

26一　茶にはゆるせかこい女郎も太夫染
　ながれにす丶ぎあげた江口のもやう

27一　小袖の数いくつそめてもあかね染
　源氏づくしのむらさき式部の模様

1、桐壺の更衣（上、3丁ウ・4丁オ）

aかざり、ひわいと（鶸糸）、しだ（羊歯）、ひはもへぎ（鶸萌葱）、かうばいいと（紅梅糸）、ゆづりは、もへぎ、かうばい糸、はね（羽）、白、ちやいと（茶糸）、たちばな、かうばい、ひわいと（鶸糸）、若松の木、若め（芽）、かうばい糸にて、松ば、ひわもへぎ糸にして。b地、白、松かざりのもやう。c（素篝）すぬひ、桐つほのもやう。

桐つぼのかうゐ

御慶めでたい、よい春の年も、若松のもやうをめしたるは、徳まんざい（万歳）長者のおとむすめ（乙女）にはあらで、名にたちはなの（立ち・橘）、天しる地しろの小袖を、きりつぼのかうゐ（桐壺更衣）にぞ、みめかたち、らうたく、なまめかしかりしを、みかど（帝）ことの外に、ときめかせ給ひ、名にあふ、ひかるげんし（光源氏）の君をも、うみ給ふ、御母うへなれば、なさけの色を、そめ小袖、ひく手になびく、かざ

りなわ、男むすびに、ちぎりはふかい恋のふち、ちいろ(千尋・血色)の糸に、ぬふてふもやう(模様)、ちとせをのぶる鶴のすぬひ(巣・素縫)にぞ。

【語釈】○しだ　羊歯類のこと。特に新年の飾りに用いるウラジロをさすことが多い。○ひはもへぎ　鶸の羽の色のような萌葱色。あさみどり。○ゆづりは　模様の一つ。譲葉を図案化したもの。○もへぎ　黄と青との中間色。やや黄色がかった緑色。○すぬひ　刺繍の一種。切付け模様に対して、直接その布地に美しく縫取りをしたもの。○天しる地しろ　「天知る、地知る、我知る、人知る」(『後漢書』楊震伝)を踏まえる。○男むすび　右端を左の下にまわし、右へ返して作った輪に左端を通して結んだもの。一端を引いてもほどけず、結び目ができる。【出典】『源氏物語』桐壺巻。

2、空蟬(上、6丁ウ・7丁オ)

a扇、むらさきかのこ(紫鹿子)、浅ぎかのこ、べにかのこ(紅)、文字、ぬい(縫)、きんし(金糸)、わか松(若)、ぬいにして。b地、白、扇に若松のもや(模様)う。cはゝ木ゝのもやう。

はゝきゝ

あやにくに心をかくるこひ衣、なさけの袖の、うつりかのこ(移り香・鹿子)、又もあふぎ(会ふ・扇)の、すへひろく(末広・末広く)、たのみをかけて、その年の、まだ若松の、みどりの色にまよふは、そなたのかたゝがへ(方違)、わが妻ならぬつまがさね(夫重)、いよのすけ(伊予介)が、いよ〳〵わすれがたき(思惑)おもはくを、ひかるげんじのひかりに、うばゝれ奉りけるにや、その頃の歌、

かすならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらすきゆるはゝ木ゝ

【語釈】○浅ぎかのこ　緑がかった薄い藍色の鹿の子絞り。○べにかのこ　紅色の鹿の子しぼり。○きんし　金色の糸。金襴の織物、刺繍、縫い取りなど種々の装飾に用いられる。金紗。○はゝきゝ　空蟬を指す。『源氏物語』関屋巻で「帚木」

と称されることに拠る。○つまがさね　有夫の女が他の男と肉体関係を結ぶこと。間男をすること。○いよのすけ「いよ〳〵」を引く序詞。空蝉の夫。前妻の子に軒端荻などがいる。【和歌の出典】『源氏物語』帚木巻、空蝉の詠歌。

3、軒端荻（上、9丁ウ・10丁オ）

aそで口、□かのこ、梅のぼ(木)く、かのこ、ば(梅花)いくわに、所〳〵、白ほし入、たん(短冊)ざく、あさぎかのこ、白にして。b地、べ(紅)に、梅にたんざくのもやう。cうつせみの模様。

うつせみ

恋の色地べ(紅)にうつす、うつせみの、きつゝなりよきから(唐)衣、いよぬ(ママ)け申す、いよのすけがむすめのもやう、すがた、たが袖ぶりの梅がゝは、ひら(平糸カ)しいとにや、心たま(魂)も、とびたつばかりのひかる君も、此たんざくに、一しゆ(首)のうた、

うつせみの身をかへてけり木の下になを人からのなつかしきかな

【語釈】○うつす「うつせみ」を導く序詞。○きつゝなりよきから衣「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（『伊勢物語』第九段）○ひらしいと「平糸」は縒りの少ない生糸。【和歌の出典】『源氏物語』空蝉巻、光源氏の詠歌。第二句「身をかへてける」。

4、夕顔（上、12丁ウ・13丁オ）

aふみばこ、白かの(鹿子)こ入まぜ、むぐら、地、をちか(ママ)のこにして、宝づくし、いづれもぬ(縫)い。b地、黒、葎(むぐら)に文箱(ふみばこ)のもやう。

c夕がほのもやう。

夕かほ

八重むぐら、しげれる宿にはあらで、夕かほの花の白くさける、五条あたりの、あやしき小家に、しのびより給ふは、いたくかうばしき扇にはあらず、此文ばこのちつ（帙）、かの文を、中たちとして、あだなで（徒名・撫子）しこの母君と、たちし地くろの、たそかれどき、よめ（夜目・嫁）入小袖のうはぎのもやうには、もじからぬ（ママ）そめ色、よきはよく、よからぬ女も、みまがふべきにや、げんし（源氏）、よりてこそそれかともみめたそかれにほの〳〵みつる花の夕かほ

【語釈】○をち　植物「あぶらな（油菜）」の古名か。または「をちば（落ち葉）」の「ば」の脱落か。○八重むぐらしげれる宿　「八重葎しげれる宿のさびしきに人こそみえね秋はきにけり」（『百人一首』四七、恵慶法師）。○夕かほの～小家「五条なる所に夕顔の咲きかかりたる小家あり」（『源氏小鏡』夕顔巻）○いたくかうばしき扇　「白き扇のいたくかうばしき」（『源氏小鏡』夕顔巻）【和歌の出典】『源氏物語』夕顔巻、光源氏の詠歌。

5、若紫（上、15丁ウ・16丁オ）

a文字、くちばかのこ（朽葉）、雪、同前、かきつばたの花、うこん（鬱金）入て。b地、けんぼう（憲法）、若紫（わかむらさき）のもやう。c若むらさきのもやう。

若むらさき

わか草のねよげにみゆるむらさきのうへ、こす（超す）人なき、みめかたちを、げんし（源氏）十七の御とし、心のやみに、かいまみ給ひ、草のゆかりを、おぼしやらせて、ひめ君、十の御としより、雲がくれのあか月まて、もてかしづかせ給ふは、又なき、いもせの、御ちぎり、くちせぬ、くちばの、めでたきもやうゑ（模様絵）に、かきつばたのそめ小袖を、ゆきのは（肌）だへに、めし給ふ人は、つもるよはひも、若むらさきのわかやかにや、み奉りなん、

手につみていつしかもみん紫のねにかよひけるのへのわか草

【語釈】○くちば　朽葉色の略。赤みを帯びた黄色。○うこん　ショウガ科の多年草の根茎で染めた鮮黄色。○けんぼう染模様の名。古くはふしがね、後には質の悪い灰墨を用いて、黒茶色に小紋を染めたもの。慶長（一五九六～一六一五）の頃、京都西洞院四条の剣術家吉岡憲法（憲房・兼房・建法とも）が初めて染め出したという。○わか草のねよげにみゆる「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」（『伊勢物語』第四十九段）○げんし十七の御とし　旧年立に拠る。新年立では十八歳。○草のゆかり　「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん」（『源氏物語』若紫巻）○雲がくれのあか月　「明けはつるほどに消えはてたまひぬ」（『源氏物語』御法巻）。【和歌の出典】『源氏物語』若紫巻、光源氏の詠歌。

6、朧月夜の君（上、18丁ウ・19丁オ）

aかた（肩）、黒、あふぎ（扇）、べに、あさぎかのこ、をみなへし、かのこ、ぬい、あふぎ（扇）、ほね（骨）、ぬい。b地、白、扇におみなへしのもやう。cおぼろ月よの模様。

おほろ月よのないしの侍

かうきでんのほそとの（弘徽殿細殿）に、なまめきたてるは、おみなへしにあらで、おぼろ月よも、ひかるげんじに、しくものはなき、こひしり（恋知り）、なさけの色は、又となないしのかみ（又と無い・尚侍・神も知れ）もしれ、かわす扇の風すさましき、すまのうらすみ（須磨・浦住み）も、此君ゆへときけば、うきなたちくる、なみたのまくらも、きひし。

【語釈】○かうきでんのほそとの　「弘徽殿の細殿」（『源氏物語』花宴巻）○しくものはなき　「照りもせず曇りもはてぬ春

の夜の朧月夜にしくものぞなき」（『大江千里集』『新古今和歌集』）○かわす扇　「扇ばかりをしるしに取りかへて」（『源氏物語』花宴巻）【出典】『源氏物語』花宴巻

7、藤壺（上、21丁ウ・22丁オ）

a文字、かのこ、さくら、かのこ、所〳〵、白ほし入、雪の内、ふじ、白、中いろ、むらさきなど、こいろ入、雪の内、あさぎ、ませ（羅）、右のこいろ入。b半地紅、ませに藤のもやう。c藤つぼの模様。

藤つばのかうゐ

うぐひすのやどはと、とはゞ、梅かゝの、袖にうつろふ、へにかのこ、色にはまよふ恋のみち、おぼつかなくも、藤つぼの、しなだれかゝるぬれ色は、袖のなみだの雨にこそ、はれてのゝちは、かゝやく日のみやとも申けるは、いかばかり、うつくしかりなん、ゆかし。

【語釈】○中いろ　藍染の一つ。花色より薄く、浅葱より濃い中間の色。○こいろ　「香色」（薄赤くて、黄色みを帯びた色。くすんだ黄色。香染めの色。こう。）か。あるいは「小色糊」（友禅染め用の色糊の一つ。地色、細線以外の模様、また、縞の部分を染める色糊。）か。○藤つばのかうゐ　『源氏物語』では女御として入内。○うぐひすのやどはととはゞ　「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん」（『大鏡』太政大臣道長下、雑々物語）。○ぬれ色　水に濡れた色。また、そのようにつやのある色。○かゝやく日のみや　「藤壺（中略）かかやく日の宮と聞こゆ」（『源氏物語』桐壺巻）。【出典】『源氏物語』桐壺巻

8、明石の君（上、24丁ウ・25丁オ）

a文字、二字ほど、かのこにして、一字など、染入、水、ほそ（細カ）の中色、いわ、中色、あさぎにして、さくらの花、こひかき（濃柿）、茶などして、しのぶ、もへぎにして。b地、白、茶屋染、須磨（すま）の浦（うら）のもやう。cあかしの模様

あかしの上

うきおもひ、すまのうらみも、入道のむすめのなさけに、うちわすれて、いわもる水の、水もらさじと、しのぶくさのしのびて、かよふみねの松風に、ことのね（琴の音）も、いとしらし（糸・愛し）い御よそほひ、うきねのたびの、夜をあかし（明かし・明石）の上の、しほらしい、しほやき衣のもやうき（模様）て、み給はゝ、うつくしかるべし。

【語釈】○こひかき　柿色の濃いもの。○茶屋染　染色法の一つ。白地に濃淡の藍などで、花鳥・山水などを染め出したもの。江戸時代、主として武家・公家方の女性の間で、夏の帷子に用いた。○いわもる水　柏木の和歌「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」（『源氏物語』胡蝶巻）。○かよふみねの松風にことのね　「琴のねに峰の松風かよふなりいづれの緒よりしらべそめけむ」（『斎宮女御集』五七）を踏まえる。【出典】『源氏物語』明石巻

9、玉鬘（上、27丁ウ・28丁オ）

a文字、べにかのこ、あさぎかのこ、こと（琴）、白にして、いと（糸）、ほその白み。b地、との茶、峯（みね）の嵐（あらし）に琴（こと）のもやう。c玉かつらの模様。

玉かづらの内侍

こひわたる身はそれなれど、玉かづら、いかなるすじの、いとしらし（糸・愛し）く、つめ（爪）もはなさん（放）御しんもじ（心文字）にや、琴を枕の御まくばい、ふじは（伏し・富士）いそ（磯カ）、恋のけふりの袖のうつりか（移り香）には、いかなる人も、心ときめくと、夕がほの御むすめなれば、よりて

こそ見め、なでしこ（撫でし子・撫子）の花の色ある此もやう。

【語釈】○との茶（礪茶）　江戸時代の染色の名。赤黒い色の勝った茶色。○峯の嵐に琴　斎宮女御の和歌「琴のねに～」（8明石の君の語釈に掲出）○こひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすじ　光源氏の和歌「恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢを尋ね来つらむ」（『源氏物語』玉鬘巻）。○つめもはなさん　「爪を放す」とは、遊女が爪を切りはがして客に贈り真情を示すこと。○しんもじ（心文字）　心、心の中の意の女性語。多く、江戸初期に遊女の手紙の用語として用いられた。○琴を枕　「御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり」（『源氏物語』篝火巻）。源氏寄合。○まくばい（目合）　男女が契りを結ぶこと。○よりてこそ見め　光源氏の和歌「寄りてこそ～」（4夕顔の本文に掲出）【出典】『源氏物語』

10、女三の宮（中、1丁ウ・2丁オ）

aみす（御簾）、雲、べに（紅）、あさぎかのこ（浅葱鹿子）、もの、本、白入、又、ひわかのこ（鶸鹿子）入て、すそ、こん（紺）、あさぎかのこ、ひはかのこ（鶸鹿子）にして、しのぶぬい。b地、うこん（鬱金）、みすに源氏物語（げんじものがたり）のもやう。c女三の宮の模様。

女三の宮

小侍従を中たちとして、あさみどりのうすやうに、一筆申まいらする、御ゆかし（ゆかし・柏木）は木のゑもんを、つくろいかすめる、くれのまりの（庭）には、えんにひかれて、ねこ、つなのみすの内なる御すがたを、ちらとみかき（見・御垣）がはらの露、むすぶちぎりの袖の（香に薫る・薫大将）かにかほる大将を、うみ給ふは、誠にけふりくらべの、たきがらとやいわまし、いかがいわねの、わり松の煙と、けんじ（源氏）の君に、たきつけを申たし、

たか世にかたねをまきしと人とは、いか、いはねの松はこたへん

【語釈】○ひわかのこ　鶸の羽を連想させる黄緑色の鹿の子絞り。○けふりくらべ　女三の宮の和歌「立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに」（『源氏物語』柏木巻）。【和歌の出典】『源氏物語』柏木巻、光源氏の詠歌。第二句「たねはまきしと」。

11、浮舟（中、4丁ウ・5丁オ）

a桐、べに（紅）かのこ入、さくらの花、所〳〵白ぼし入、金（きん）こもん（小紋）、はく（箔）入、桐花、きんしぬい（金糸縫）などにしてもよし。b地、むらさきかのこ入、蜘（くも）のすに（巣）、桐桜のもやう。cうき舟の模様。

うき舟

くものすに、あれたるうまはつながれじ、恋のふちせにうき舟を、つなぐはおなじ、うつりかの、かほるも、にほふも、もろ袖に、ふつつふられつ、ふりわけがみ、みだれて、けさのおきわかれ、まだ夜をこめて、きりがやつ（霧・桐が谷）、うつりにけりな、花もやう、いたづら事と、なにたちばなの小づま（名に立ち・橘）（ママ）のさき、かのこまじりのそめ色もよしや、

年ふともかはらしものか橘のこしまのさきにちきるこゝろは

【語釈】○こもん　布帛の地に星、霰、小花など種々の細かい模様を一面に染め出したもの。江戸時代の裃などに行なわれ、現在も婦人の衣服地に用いる。小紋染。○はく　唐織、水衣などの上着の下に着る小袖に、模様を金や銀の箔で摺ったり、縫ったりしたもの。○くものすにあれたるうまはつながれじ　「蜘蛛の家に荒れたる駒はつなぐとも、二道かくるあだ人を、頼まじとこそ思ひしに」（謡曲「鉄輪」）。「蜘蛛の網描（か）きたる水干に付けて、歌の心など言ひて」（『徒然草』二二一段）○かほるもにほふも　「薫る」「匂ふ」と、薫の君・匂宮の掛詞。○みだれてけさの　「長からむ心もしらず黒髪の乱れてけさは物をこそ思へ」（『百人一首』八〇、待賢門院堀川）を踏まえる。○きりがやつ　「桐が谷（やつ）」は桜の一品種。鎌倉の地名にち

なむ。○うつりにけりな花もやういたづら事と「花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」（『百人一首』九、小野小町）を踏まえる。【出典】『源氏物語』浮舟巻、匂宮の詠歌。第二句「かはらむものか」。

12、式子内親王（中、7丁ウ・8丁オ）

aにほひの玉、あさぎかのこ（浅葱鹿子）、べにかのこにして、なわめぬい（縄目縫）、花がたぬい（形縫）、金糸。b地、黒、左まきに（ひだり）香玉（にほひのたま）のもやう（模様）。c式子内しんわう（親王）のもやう（模様）。

式子内親王

やまと（大和）歌は、こひ（恋）をたねとしよみ給へと、ていかきやう（定家卿）の御しなん（指南）したてまつらせ給ふも、わが身のうへにほのめかし、あさぎかのこ（浅葱鹿子）のあさ（浅）からぬ、おもひの色をべにかのこ（紅鹿子）、いわねどしるき（著）御めづかい、袖のにほひのたまのを（玉）よ、たえなばた（絶）へぬ御か（語）たらひも、歌を中たちとして、

玉のをよたへなはたえねなからへはしのふることのよはりもそする

【語釈】○にほひの玉（匂玉）　球形に作られた匂い袋。匂いの玉。○なわめ　より合わせてできた縄の筋。また、そのような模様。○やまと歌はこひをたねとし　「やまとうたは人のこころをたねとしてよろづのことのはとぞなれりける」（『古今和歌集』仮名序）。【和歌の出典】『百人一首』八九、式子内親王。

13、恬子内親王（中、10丁ウ・11丁オ）

a上のしのぶ（忍）の内、地あさぎ（浅葱）、さくら、あさぎ、ちや（茶）入て、すそのいわ（岩）、あさぎ、こん（紺）入て、しのぶ、こん、こいかき（濃柿）入てよし。b地、藤、す、竹、桜にしのぶのもやう。c てんし（恬子内親王）ないしんわうの模様。

恬子内親王（てんしないしんわう）　斎宮

（伊勢桜）いせさくらのさいくう（斎宮）を、しのぶずり（忍摺）の、かりぎぬ（狩衣）きたるむかし男なん、をもひそめ（思ひ初め・染紙）がみに、心のもやうをかきくらす、やみは、あやなし、梅の花、いろこそみへね、かこつけの、かりの（狩の使）つかひを、こひの、中たちとして、

君やこしわれや行けんおもほえすゆめかうつゝかねてかさめてか

【語釈】○恬子内親王　生没、?～九一三年。文徳天皇の皇女。母は紀静子。貞観元年、伊勢斎宮になり、同十八年、清和天皇の譲位により退任。○いせさくら　伊勢神宮の境内に咲く桜の花。○しのぶずりのかりぎぬきたるむかし男　「その男、忍摺の狩衣をなむ着たりける」（『伊勢物語』初段）○そめがみ　「染紙」は斎宮忌詞で、仏教の経典をいう。紺や黄に染めた紙を用いたところからの名。○やみはあやなし　「春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」（『古今和歌集』春上、四一、躬恒）【和歌の出典】『伊勢物語』第六十九段、狩の使。

14、染殿の后（中、13丁ウ・14丁オ）

a文字、べにかのこ（紅鹿子）、車、ひわかのこ（鶸鹿子）、さくら花、白かのこ、ぬい、ところ〳〵に、こもん（小紋）、はく（箔）、入。b地黒、花見くるまの模様。c染とのゝ后の模様。

染とのゝささき

小袖の山、そめ色の海、かぎりしられぬ、もやうぐさなど、めづらしき物ずきを、人やむすばん、ゑふでのさき、名もそめどのと、きくからに、御所上らう（鳴子）の風流を、花見車の、ひくなるこ（鳴子）、みやこよ、ひなよ、ひながたに、うつすべに、うちつけ、はへて、ささきのすがたに、まがふべくも、なさけの色は、

われならは鳥なくまても待へきにおもはねはこそ君はまとろめ

【語釈】○染との、きさき　藤原明子。生没、八二八～九〇〇年。藤原良房の娘。文徳天皇の后。清和天皇の母。天狗に悩まされた説話が『今昔物語集』巻二十第七などに伝わる。

15、二条の后（中、16丁ウ・17丁オ）

a文字、べにかの(紅鹿子)こ、菊のはなに、所〳〵あさぎかの(浅葱鹿子)こ入、花葉に、所〳〵無地あさぎ入て、白浅ぎの上を、うはゑにて書べし。b地うこん、菊の露の模様。c二条の后の模様。

二条の后

しらたま(白玉)かなにぞと、露に、ぬれかくる、あくたかはら(芥河原)の、あかぬ中、おに一口の、わかれの袖、なみだの雨に、神なりさはぐも、こひ(恋)のぬす人の、たゝりにや、月やあらぬ、はるや、むかしの、むかし男、色のもやうは、今やうの、恋のひな(雛形)がたとも、なりぬべし。

白たまかなにそと人のとゐしとき露とこたへてきへなましものを

【語釈】○二条の后　藤原高子。生没八四二～九一〇年。藤原長良の娘。清和天皇の后。陽成天皇の母。寛平八年（八九六）密通を疑われ廃后。天慶六年（九四三）皇太后に復された。入内前の在原業平との悲恋で有名。○あくたかはら　「芥川といふ川」（『伊勢物語』第六段）○おに一口　「鬼はや一口に食ひてけり」（『伊勢物語』同段）○神なりさはぐ　「神鳴るさわぎ」（『伊勢物語』同段）○月やあらぬ　「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『伊勢物語』第四段。『古今和歌集』恋歌、七四七）【和歌の出典】『伊勢物語』第六段、芥河。

16、衣通姫（中、19丁ウ・20丁オ）

a文字は、かのこ、梅は所〳〵かのこ入、べにかのこか（紅鹿子）、くちばかのこにして（朽葉鹿子）、又、所〳〵ぬいなどあしらいて。b地、けんほう（憲法）、梅に窓（まど）の雪のもやう。cそとおりひめの模様。

そとおり姫

霞のあや、花のにしきを、そとおりひめ、いをはたゝつる（五百機）、まどの梅、かうばい色（紅梅）の下ひも（紐）ゝ、とけてみだるゝ、ねくだれ（寝くたれ髪）がみ、きやらの油（伽羅）のねりぎぬ（練り・練絹）を、かづくいせおのみるめもと（伊勢男・海松布・見る目元）、すゝしのきぬ（涼し・生絹）の、いとほそき、柳のこしや、みどりのまゆ、雪のはだへの白むくに、ねまきの袖のかとりのきぬ（香・縑の衣）、おきわかれてのきぬ〳〵は、又の御げん（御見）をまち人の、うらなひ思ひをあらはして、

わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまいこよひしるしも

【語釈】○くちば　染色の一つ。薄い藍色がかった黄色。黄枯茶。○そとおり姫　允恭天皇の妃。容姿にすぐれ、美しい肌の色が衣を通して光り輝いて見えるところから名づけられた。のちには玉津嶋明神として垂迹との説が付加される。○いをはた　たくさんの織機。「織り姫の五百機立つる窓に入って」（謡曲「山姥」）。○かとりのきぬ　縑（かとり）は、細い糸で目を細かく固く織った薄い絹布。縑で仕立てた衣服は初夏に着用。【和歌の出典】『日本書紀』巻第十三、衣通郎姫の詠歌。『古今和歌集』巻第十四、墨滅歌。

17、和泉式部（中、22丁ウ・23丁オ）

a文字丸かのこ（鹿子）入、所ゝきんし（金糸）入、梅のぼく（木）、いつれもぬい（縫）にして、花つぼみ（蕾）同断、べかのこ（紅鹿子カ）、あさぎかのこ（浅葱鹿子）にしてもよし。b地、白、ぬい入、梅に歌の丸のもやう（模様）。cいつみ（和泉）式部の模様。

いづみ式部（和泉）

しやうとうもんゐんに宮つかへし給ひ（上東門院）、おゝえのまさむねのむすめ（大江雅致）、いづみのかみ道さだ（和泉守）が妻（女）となれるより、いづみ式部（和泉）と申せしとかや、きよらなるさまは（清）、とうぼくゐんの梅のせい（東北院）、くぜぼさつのかほばせ（救世菩薩）、歌はたけながく（精）、なさけは袖ひろし（情）（広）、こゝちれいならぬころ（心地）、よみてつかはせし（例）、此うたのあて人ぞ（遣）、うらやましくおぼゆれ（歌）（貴）。

あらさらむ此世のほかのをもひてに今ひとたひのあふよしもかな

【語釈】○しやうとうもんゐん　藤原彰子。生没九八八～一〇七四年。道長の娘。一条天皇の后。○とうぼくゐん　法成寺の一院。平安京の東京極大路東、一条大路末の南側にあった。上東門院の御願により、長元三年（一〇三〇）八月創設。もと法成寺内の東北の隅にあったことによる名。のち康平元年（一〇五八）の火事で焼け、同四年七月、法成寺の北に再建された。中世には東北院念仏や弁財天、和泉式部の軒端梅で知られた。十六世紀中ごろには天台宗から時宗に転じ、十七世紀末に焼けてからは吉田山の東（左京区浄土寺真如堂町）に移転し現存する。【和歌の出典】『百人一首』五六。『後拾遺和歌集』巻第十三、恋三、七六三、和泉式部。結句「あふこともがな」。詞書「心地れいならず侍りける頃、人のもとに遣はしける」。

18、小式部内侍（中、25丁ウ・26丁オ）

a（橋）はし、あさぎ（浅葱鹿子）かのこ、せいがい（青海）、をちかのこ（ママ）（鹿子）、菊、あさぎ（浅葱鹿子）かのこ、ぬい（縫）、きんし（金糸）入て。b地、へに（紅）、天の橋たて（立）のもやう（模様）。c小式部の模様。

小式部の内侍（ないし）

恋はすべて、人の心をはつ（初）霜の、おきまどはせる（惑）花の袖、そめ（染）て地べにのあからさ（紅）まにも、とみによみなすうぐひす（鶯）の、

（歌）うたのやさしさ母うへのいづみ（和泉）式部にも、おさ〳〵おとる（劣）まじくやおぼへぬ、されば中納言さだより（定頼）も、これをいぶかしく（疑）うたがひて、たはふれ給へは、式部、引とめて、

大江山いくの、みちのとをけれはまたふみも見すあまの橋たて

【語釈】○をちかのこ　4夕顔の語釈、参照。○はつ霜のおきまどはせる花「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」（『百人一首』二九。『古今和歌集』秋下、二七七、凡河内躬恒）○中納言さだより　藤原定頼。生没、九九五～一〇四五年。藤原公任の長男。四条中納言と呼ばれた。中古三十六歌仙の一人。小式部内侍に歌でやりこめられた逸話は有名で、『十訓抄』『古今著聞集』などに所収。【和歌の出典】『百人一首』六〇、小式部内侍。

19、春日の里の姉妹（下、1丁ウ・2丁オ）

a大文字、へにかの（紅鹿子）こ、あさぎかの（浅葱鹿子）こ、小文字、白にして、嶋のうち、あさぎ、しのぶ、こんのほそゞ（紺細染）め、桜、中色、こい（濃柿）かき、うすがきそめ（薄柿）入にして。b地、うこん（鬱金）、みだれ染のもやう。cかすがの（春日）里の女模様。

かすがの里の女

かりぎぬ（狩衣）の、すその、もやうは、しのぶずり（忍摺）、心地まどふは、たき物の、かすが（香・春日）の里の、はらからの、すがた、なりひら（形・業平）、かいまみて、いとゞ、しのぶの、みだれ心、かぎりしられぬ、をもひ草、わかむらさき（若紫）にはあらで、うこんぞめ（鬱金染）の、きのとくやと（気の毒カ）、すゞりの（硯）すみのすり（墨の磨り・すり衣）衣に、かくいちはやき歌を、よみてやる、その返歌に、

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに

【語釈】○嶋　嶋の形の染模様。○ほそゞめ　細い紺色の筋模様を幾筋も染め出した染め物。○うすがき　薄柿色。また、

その色の着物。○かりぎぬの～しのぶずり　13恬子内親王の「しのぶずりのかりぎぬ」の語釈、参照。○しのぶのみだれ心かぎりしられぬ「春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」（『伊勢物語』初段）。○うこんぞめ　鬱金色（濃い鮮黄色）に染めること。また、そのもの。○すり衣　山藍や鴨跖草（つきくさ）などの染め草の汁ですりつけて、草木・花鳥など種々の模様を染め出した衣。藍摺・丹摺・忍摺などがある。すりぎぬ。○かくいちはやき「かくいちはやきみやびをなむしける」（『伊勢物語』初段）。【和歌の出典】『伊勢物語』初段。

20、京極御息所（藤原褒子）（下、4丁ウ・5丁オ）

a文字、へにかのこ（紅鹿子）、あさきかのこ（浅葱鹿子）、あわ（粟）、くちはかのこ（朽葉鹿子）、あわのは（粟葉）、中色、ちや（茶）、ひわあさぎ（鶸浅葱）入てもよし。b地、藤ねす（鼠）み色、又、藤す（煤）ゝ竹、あわのうら（粟浦）風のもやう。c京極みやす所の模様。

京極の御息所（きやうごく　みやすどころ）

しへい（時平）公の御むすめ、くはんへいほう（寛平法皇）わうのきさきにて、ならびなき御かたち、しがのうら（志賀浦）風吹ちらす、花をながめのかへ（帰）るさに、しが（志賀）寺の上人、みそめまいらせてより、しづ心なきこひのたね、あわれと覚しけるにや、みやす所（御簾）みすの内より手をさし出し給へば、上人、手にとりつきて、

初春の初音のけふの玉はゝきてにとるからにゆらく玉のを

返し、

こくらくの玉のうてなのはちすはにわれをいさなへゆらく玉のを

【語釈】○藤ねすみ色　染色の名。薄紫色でやや鼠色がかった色。また、その色に染めたもの。ふじねず。○藤すゝ竹　染色の名。薄紫の煤竹色がかったもの。○京極の御息所　藤原褒子。生没年未詳。藤原時平の娘。宇多天皇の御息所。○しへ

い公　藤原時平。生没、八七一～九〇九年。宇多・醍醐天皇に仕え、左大臣に至る。○くはんへいほうわう　宇多天皇。生没、八六七～九三一年。寛平九年（八九七）譲位後、寛平法皇と称す。○しがのうら　近江国の歌枕。琵琶湖のほとり。○花をながめのかへるさに　「志賀の花見の帰るさに」（『太平記』巻三十七）。○しが寺　滋賀県大津市滋賀にあった寺。天智天皇の勅願寺。○みすの内より手をさし出し給へば、上人、手にとりつきて　「御手を御簾の内より少し差しいでさせ給ひたるに上人、御手に取り付きて」（『太平記』巻三十七）【和歌の出典】第一首、『万葉集』巻二十、四五一七、大伴家持。『古今六帖』一、三二六。第二首、『太平記』巻三十七「身子声聞・一角仙人・志賀寺上人の事」。『俊頼髄脳』、『源平盛衰記』巻四十八「女院六道廻り物語の事」では、第二首の上の句が「よしさらばまことの道にしるべして」。

21、井筒の女（下、7丁ウ・8丁オ）

a ほに（帆）、へにかのこ（紅鹿子）、あさぎかのこ（浅葱鹿子）入、すそ、なみ（波）、べに（紅）、あさぎかのこ（浅葱鹿子）入、帆に、あさぎ（浅葱）、うこん（鬱金）入、なみ（波）も右、同断。b地白、帆に、たつ浪のもやう。c井つゝの女模様。

井筒の女

風ふけば、おきつしらなみ（白波）、たつた山、もみぢかさね（紅葉）の色ふかき、ゐづゝ（井筒）によりて、うない（髫髪子）この、まだふり袖の、ふりわけがみ、たれかあぐべき、ほかけ舟、こがれて（漕がれ・焦がれ）、すへは、ほい（本意）をとげし、きのありつね（紀有常）がむすめのもやう、いかう（衣桁）にかけし、まろがたけ、ゆつたりとした、よめ入小袖、よはにや君が、うはぎのうつりが、いもみざるまの、たきもの（薫物）もいそがし。

つゝゐつの井つゝにかけしまろかたけおいにけらしないもみざるまに

【語釈】○風ふけば　「風吹けば沖つしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ」（『伊勢物語』二十三段）。○うないこ（髫髪子）　髪を首のあたりに垂らしている子供。また、ひろく童児をもいう。○ふりわけがみ　「くらべこしふりわけ髪も

肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」（『伊勢物語』同段）。○ほいをとげし　「つひに本意のごとくあひにけり」（『伊勢物語』同段）○きのありつねがむすめ（紀有常女）　歌人。生没年未詳。平安時代前期の人。紀有常の娘。在原業平の室。『冷泉家流伊勢物語抄』や謡曲「井筒」では、当段の男女を業平と紀有常の娘とする。○いかうにかけしまろがたけ　本文末尾の和歌を踏まえる。○よはにや君が　前掲の和歌「風吹けば」を踏まえる。○いもみざるまの　本文末尾の和歌を踏まえる。

【和歌の出典】『伊勢物語』二十三段。第四句「すぎにけらしな」。謡曲「井筒」では「生ひにけらしな」。

22、勾当内侍（下、10丁ウ・11丁オ）

aさくら、かのこ、白ぼし入、ぬひなどあしらいて、なみ（波）、花色などそめ入、かのこお入、うさき白にして、上にていろゑ（色絵）、うはゑ（上絵）。b上雲の内、べに、すそ（裾）、あさき（浅葱）、雲に桜、なみ（波）にうさぎのもやう。c勾当のないし模様。

勾当の内侍（こうたうのないし）

むらさめのはれまの月の御かほばせ、木のはがくれの花のすがた、みかきがはら（見・御垣が原）のことの（琴）つまおとに、いとど心をひくあみ（網）の、なみのよるべもなきふせい（風情）に、あこがれ給ふは、につた（新田）左中将よしさだ（義貞）と聞えしを、君もあわれとおぼしめし、ひよくれん（比翼連理）りをゆるし給ふは、まことにむすぶの神の神かけて、とかじとおもふ下ひもゝ、とけてわりなき中となり給ふも、うらやまし。

【語釈】○いろゑ（色絵）　彩色した色。着色画。彩色画。○うはゑ（上絵）　布を白く染めぬいた所に、絵の具で絞や模様を描くこと。また、そのもの。○なみにうさぎのもやう　江戸時代に流行したデザイン。紋所の名。「月、海上に浮かんでは兎も浪を奔るか」（謡曲「竹生島」）○勾当の内侍　『太平記』には「頭大夫行房の娘」とある。行房は能書家である世尊寺経尹の子。○みかきがはら　宮中や貴人の邸宅の築垣のあたりの野原。また、宮中や貴人の邸内の庭のこともいう。○こ

とのつまおと「新田左中将、常に召されて、内裏の御警固にぞ候はれける。ある夜月すさまじく風ひややかなるに、この勾当内侍、半簾を巻いて琴を弾じたまひけり。中将その怨声に心引かれて、覚えず禁庭の月に立ちさまよひ」（『太平記』巻二十、義貞の首獄門に懸くる事　付勾当内侍の事）。○につた左中将よしさだ　新田義貞。生没、一三〇一～三八年。武将。鎌倉幕府を滅ぼす。のち足利尊氏と対立して討死。○君もあわれとおぼしめし「叡慮あはれなる方に思し召し」（『太平記』巻二十、同前）。【出典】『太平記』巻二十。

23、小宰相の局（下、13丁ウ・14丁オ）

a文字、べにかの（紅鹿子）こ、竹、黒、べにかの（紅鹿子）こ、さゝ、白、梅の丸、いづれもぬいにして。b地、うこん、竹に梅の丸のもやう。c小宰相の局のもやう。

小宰相（こざいしやう）のつぼね

上西門院につかふまつり、うこんのばゝ（右近の馬場）の、梅のはなさかりのみゆきに、ぐせられ侍りしを、平のみち（通盛）もりみそめまいらせ、「雲まの月に物おもふ」と、よみておくりしを、恋の中だちとして、あけくれ（明け暮れ・呉竹）竹のわりなかりし（割り・理無かり）中も、ほかにうつろふべにかのこの、かれ〳〵なりし折ふしの歌に、

くれ竹のもとはあふ夜もちかゝりきすへこそふしはとをさかりけれ

【語釈】○小宰相の局　藤原憲方の娘。上西門院の女房。夫の平通盛の後を追い入水。○上西門院　鳥羽天皇の皇女、統子内親王。後白河院准母。○うこんのばゝ　右近衛府に属した馬場。毎年五月、ここで近衛の役人の競馬の行事があった。○はなさかりのみゆき「上西門院、四方の花を御覧の為に北野の御幸ありけるに（中略）万里を飛びし梅の花」（『源平盛衰記』巻三十八、小宰相局付慎夫人の事）。「女院、法勝寺へ花見の御幸」（『平家物語』巻九、小宰相身投）。○平のみちもり

平通盛。教盛の子、清盛の甥。一の谷で戦死。○雲まの月に物おもふ　「吹き送る風のたよりに見てしより雲間の月にもの思ふかな」（『源平盛衰記』巻三十八、同前）。○くれ竹　植物「はちく（淡竹）」の異名。また、特に御所の清涼殿の庭に植えてある竹についていう。【和歌の出典】『源平盛衰記』巻三十八。

24、小督の局（下、16丁ウ・17丁オ）

a文字、くちばかのこ（朽葉鹿子）、をみなへし（女郎花）、中色、あさき（浅葱）など入、葉にも所々入て。b地、けんぽう（憲法）、若草（わかくさ）にをみなへし（女郎花）のもやう。c中納言の局の模様。

中納言（ちうなごん）のつぼね

さくら町の中なごんしげのり（中納言成範卿）きやうの御むすめ、ひすい（翡翠）のかんざしたをやかに、さうが（双蛾）のまゆずみみどりにて、びわ琴のしらべにすぐれ給へば、ひく手あまたによばひわたりけるを、中にもうんゐ（さんゐカ）の中将しげひら（重衡）の、しげきおもひをつげまいらせ、をみなへし（女郎花）のうすやう（薄様）に、おもひのたねを若草の、むすびてをくるその返歌に、

君ゆへにわれもうきなをなかしなはそこのみくつとともにならはや

【語釈】○中納言の局　小督。藤原成範の娘。冷泉大納言隆房、高倉天皇にも愛された。○さくら町の中なごんしげのりきやう「この女房と申すは故少納言入道信西の孫、桜町中納言成範卿の娘、中納言局とぞ申しける。今年二十一にぞなりたまふ。琴琵琶の上手にて」（『源平盛衰記』巻三十九、友時重衡の許に参る付重衡内裏の女房を迎ふる事）。「中宮の御方より、小督殿と申す女房を参らせらる。此女房は桜町の中納言成範卿の御娘、宮中一の美人、琴の上手にておはしける。」（『平家物語』巻第六、小督）○ひすいのかんざし　翡翠（かわせみ）の羽のように、つややかで長く美しい髪。緑の黒髪。翡翠の髪。○さうが「蛾」は眉のこと。美人の眉。○しげひら　平清盛の子。【和歌の出典】『源平盛衰記』巻三十九では、中納

言局から重衡への返歌。

25、小野小町（下、19丁ウ・20丁オ）

a たんざく（短冊）、いづれもべにかのこ（紅鹿子）、さくら（桜）の花、ところ〳〵かのこ（鹿子）入、ぬいきんし（縫金糸）。b 地むらさき（紫）、桜に短冊（たんさく）のもやう（模様）。c 小野、小町模様。

小野、小町

恋すてふおもひは、いとどふかくさ（深く・深草）の露のなみだは、しやう〳〵（少将・瀟湘）の夜の雨にもうつろはぬ、花のそめ袖ふられ（振）て、もどる（百夜）も、よの、かず（数）つもる、うらみ（恨）のこひ風が、あたら（惜）桜をちらし（散）そめ（初め・染）地はむらさき（紫）のゆかりのすへ（末）、身はあふさか（逢坂）のあふむが（鸚鵡返）へしと、此たんざく（短冊）に書つけて、

雲のうへはありしむかしにかはらねとみし玉たれのうちそゆかしき

【語釈】○たんざく　謡曲「関寺小町」の作り物に短冊を付ける。○ふかくさ　深草少将　仮人名。小野小町に恋慕して、百夜通えば逢うと言われたが、百夜目を迎えて恋死したとされる伝説上の人物。京都市山科区の随心院近くに深草少将の通路、少将の井など伝承の地がある。「わが袂も、ともに涙の露、深草の少将」（謡曲「通小町」）。○しやう〳〵の夜の雨「瀟湘の夜の雨しきりに降つて」（謡曲「蟻通」）。【和歌の出典】謡曲「鸚鵡小町」。結句「内やゆかしき」

26、江口の遊女（下、22丁ウ・23丁オ）

a さぎ（鷺）、べにかのこ（紅鹿子）、あさぎかのこ（浅葱鹿子）、又、白にして、うはゑ（上絵）、あし（蘆）、中色、ほそゝめ（細染）、同は、もへぎ（萌黄）、ほそそめ（細染）。b 地、玉子色、あしにさぎ（蘆）のもやう（模様）。c 江口のもやう（模様）。

江口の遊女

なにわのあし(難波)(蘆)の、つのくに(津国)や、江口といふ所を、西行法師とをり給ひけるとき、なか(長)月廿日あまり、冬まちか(待)ほ(顔)の村しぐれ(時雨)、さえくら(冴え暗)し侍りけるを、はれま(晴間)の宿をかしこ成、家にかり給へは、遊女いて、、かさ、さり(ママ)けれは、西行、

世の中をいとふまてこそかたからめかりのやとりをおしむ君かな

遊女うちわらひて、

世をいとふ人としみればかりのやどに心とむなとおもふはかりそ

【語釈】○江口　大阪市東淀川区の地名。淀川から神崎川（旧三国川）が分流する所にある。平安時代から西海と京を結ぶ海路の河港として繁栄し、遊女の多いことで知られた。○江口の遊女　元来は、平安末期から鎌倉時代にかけて、江口で遊び人を相手にした遊女の総称。のち、謡曲「江口」によって虚構された特定の遊女、妙をさす。○なか月廿日あまり　「長月廿日あまりの頃、江口といふ所を過ぎ侍りしに」（『撰集抄』下、第八話）○冬まちかほの村しぐれさえくらし侍り　「冬をまちえぬ村時雨のさえくらし侍りしかば」（『撰集抄』同話）○はれまの宿をかしこ成家にかり　「はれ間まつまのやどをかり」（同前）。【出典】『新古今和歌集』巻十、羈旅歌、九七八、西行法師。九七九、遊女妙、第二句「人としきけば」。『撰集抄』『沙石集』『源平盛衰記』等。

27、紫式部（下、25丁ウ・26丁オ）

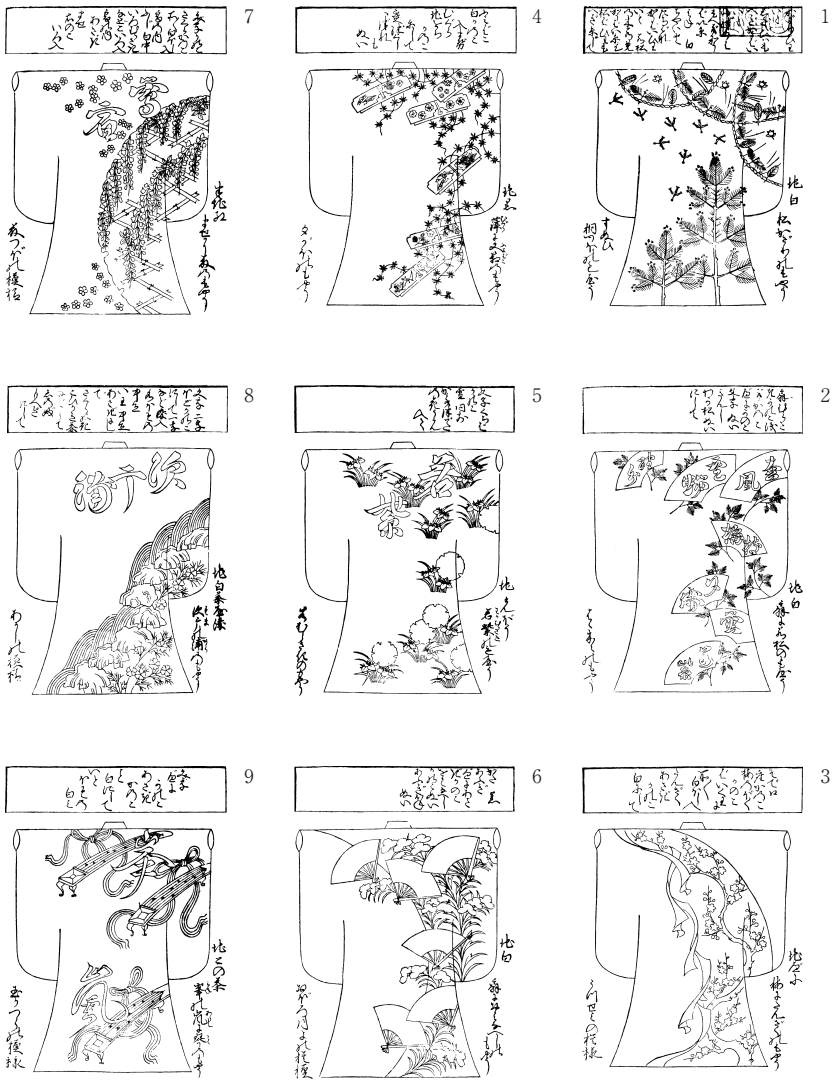
a文字、白、所〳〵かのこ(鹿子)入、きんし(金糸)、雲の内、白、かきつばた(杜若)、むらさき(紫)、葉、もへぎ(萌黄)。b地、あさき(浅葱)、雲かくれのもや(模様)。c紫式部のもやう(模様)。

紫（むらさき）　しきぶ

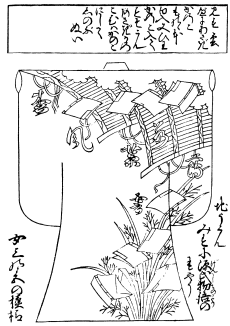
むさし野の、花のゆかりの紫式部、えんにやさしき（艶）みめかたち（眉目形）、石山寺の秋の月、ひかるげんじ（光源氏）の物がたり（語）、心をすまや（澄ま・須磨）
あかし（明石）の巻を、まづ、かきつば（書き・杜若）たの筆をそめ、長きつたへと世にのこす、歌のかず〳〵おゝき中に、はやうよりわらはとも
だちに侍りける人の、年ごろへて行あひたるが、ほのかにて、十月十日頃、月にきほひて、かへり侍りければと書て、

めくりあひてみしやそれ共わかぬまに雲かくれにし夜半の月哉

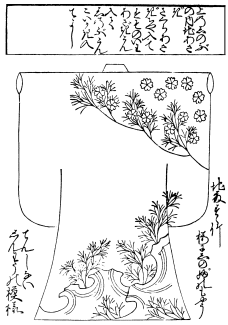
【語釈】○むさし野の花のゆかりの紫　「武蔵野の草のゆかりと聞くからに同じ野辺ともむつましきかな」（『古今六帖』第二、一一五七）。「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今和歌集』雑上、八六七、よみ人しらず）。○石山寺　「石山の観音に祈請して須磨・明石の両巻より書き始めたり」（『百人一首一夕話』紫式部）○はやうより〜　「はやくよりわらはともだちに侍りける人の、年ごろへてゆきあひたる、ほのかにて、七月十日の頃、月にきほひて、かへり侍りければ」（『新古今和歌集』雑上、一四九九、紫式部）。【和歌の出典】『新古今和歌集』。『紫式部集』一。『百人一首』五七。


1
2
3
4
5
6
7
8
9

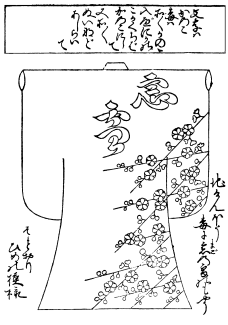
10



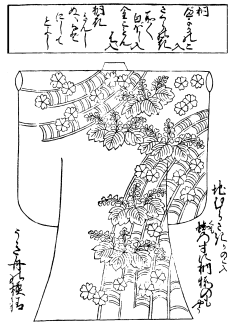
13



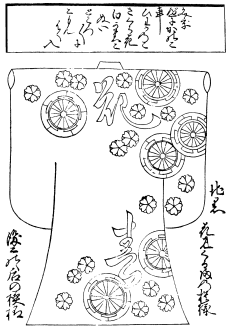
16



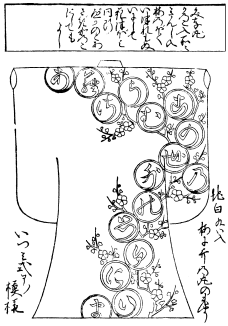
11



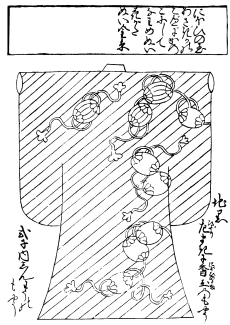
14



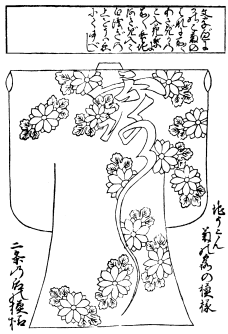
17



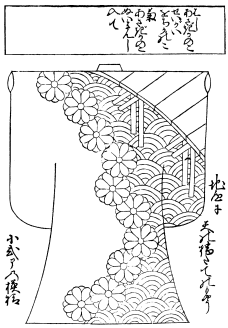
12



15

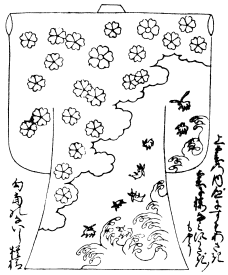


18



19

22



25

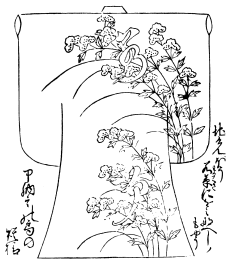
20

23

26

21

24



27